

語学教師のための対照レトリック研究 : 日英語における談話構成について

著者名(日)	高野 秀之
雑誌名	嘉悦大学研究論集
巻	49
号	1
ページ	67-85
発行年	2006-04-30
URL	http://id.nii.ac.jp/1269/00000162/

語学教師のための対照レトリック研究

— 日英語における談話構成について —

Contrastive Rhetoric for Language Teachers

— A Study of Discourse Patterns in English and Japanese Writings —

高野 秀之

Hideyuki Takano

<概要>

本稿の目的は、対照レトリックを用いて日本語と英語の談話構成を比較する先行研究を概観し、それぞれの言語の深層部分に横たわる表現上の傾向を探求することにある。Kaplan (1966) と Hinds (1983, 1990) の研究は、日本語という言語が英語の話し手にはどのように理解される傾向があるのかを知る上で有意義である。戸山 (1973)、中村 (1983)、安藤 (1986) は、日本人の視点で日本語を比較文化論的に分析したものである。二つの言語を批判的に見比べることによって、相互の潜在的な内部構造が明らかになるということは、言語研究のみならず、語学教育の領域にも良い影響を及ぼすものであると考えられる。今回の研究を通じて、若い語学教師が、言語をよりよく理解する過程においては母国語が重要な役割を果たすということを認識し、理論に裏打ちされた教育を実践する役に立てば幸いである。

本研究は、平成17年度嘉悦大学特別研究費の助成を受けて行われた。語学教育の重要性と語学教師の教育力向上にご理解をいただいた学校法人嘉悦学園に対し、心より感謝を申し上げます。研究の計画段階では、英語のテキスト読解教育を目指したE-learning教材の作成を目指していた。しかし、いくつかの理由によって、共同研究者との理論研究へ方向転換したことをここに付け加える。

<キーワード>

英語教育、対照レトリック、談話（ディスコース）、談話構造、サピア=ウォーフの仮説、言語の潜在的特徴

I. はしがき

本稿の目的は、対照レトリックを用いて日本語と英語の談話構成を比較する先行研究を概観し、それぞれの言語の深層部分に横たわる表現上の傾向を探求することにある。

日英語に関する対照レトリック研究 (contrastive rhetoric) は、これまで明確には説明できずにいた言語使用上の問題を顕在化させたという点において有意義なものである。それは

比較言語学とは似て非なるものであり、比較文化論や文化人類学の伝統を継承しているという点において社会学的である。また、言語が人間の思考や行動のパターンと連動しているという言語観に基づいているという点において、それは認知的である。しかし、日英語の深層構造を成す潜在的な特性を解明する際に用いられるのは、やはり言語学の方法となる。

対照レトリックは、英語教育の世界で発見された事実を基に成立した言語研究の方法である。あるアメリカ人英語教師は、留学生の作文指導の過程において、何種類もの異なるパラグラフ構成の形態に遭遇する。(Kaplan, 1966) 非論理的にも思える文章構成の中に一定の傾向や何らかの法則があるのではないかと感じた彼は、それをイメージスキーマで描写し、語学教育関連の定期刊行物に論文として発表した。学生の出身文化圏別に類型化されたパラグラフ構成の傾向が、初めは語学教育の世界で話題になり、次第に言語研究の重要なテーマとして言語学の世界にも採用されるようになった。論文が発表されて間もなくは、議論の元となるデータが留学生の作文であるため、それが書かれた環境や、学習者自身の英語運用能力不足から生じた単なる間違いとして見られるきらいもあった。しかし、現在では、その教師の目に映ったものは言語の背景に潜む文化的なコードの違いであり、それは人間が言語を使用する限りにおいて決して逃れることのできない「神話的な法則」のようなものであると評価されている。

この英語教師の功績は、語学教育の現場における学習者の error を新たな視点で捉え直すことの重要性を再認識させただけでなく、当時の言語研究の主流とは対極にあるパラダイムをもたらしたことにある。1960年代中ごろのアメリカと言えば Chomsky の変形生成文法理論の全盛期であり、言語研究の対象は「言語の内なる構造の記述である」と誰もが信じて疑わなかった時代である。そうした状況下において、Chomsky 自身が理論形成の過程で排除してきた「生身の人間」の振る舞いや、文のレベルを超えたテキストを言語研究の対象とすることを明言するのには、よほどの覚悟が必要であったと推察される。

対照レトリックの研究が広く受け入れられたのには、少なくとも二つの理由が考えられる。一つ目の理由として、1960年代後半のヨーロッパで誕生した text linguistics (テキスト言語学) や、同じ頃アメリカで生まれた discourse analysis (談話分析)¹⁾ が、多くの部分で対照レトリックと研究対象を共有していたことが挙げられる。どちらも、言語構造 (language structure) よりも言語使用 (language in use) に関心を示し、情報伝達のしくみを理解するには談話レベルで言語を捉えなおす必要があると主張している。言語が使用された文脈、関与者 (情報の発信者と受信者) の社会的な関係、情報伝達の形態や経路、発信者の意図、受信者の解釈という、言語の周辺的な問題とされてきたものにも目を向けなければ言語を体系的に捉えたことにはならないと考えたのである。やがて、文のレベルを超えて言語使用を見直すと、すべての言語のレベルが相互に連携し合いながら、特定の文脈の中で社会的な機能を果たしているということが解明されるようになった。

成立当初の談話研究は、言語哲学から多くの示唆を受けている。Searle (1969, 1971) に

における「発話行為」、Austin (1972) における「言外の意味」、Grice (1975) における「会話成立の原理」は、談話分析の方法のみならず、言語学に新たな可能性をもたらした。以後、言語学は談話の深層レベルにおける構造と、言葉を話す人間が主体的に創造する意味との関係に関心を高めてゆく。談話を談話として成立させている情報伝達の仕組みとされる textuality (テキスト性) の研究が特定言語の潜在的な特性を説明できるまでに発展する基礎は、Halliday and Hassan (1976)、安藤 (1986)、McCarthy (1991)、Coulthard (ed) (1992, 1994)、メイナード (1997)、影山 (2001) に詳しく記されている。

二つめの理由は、その名称が示しているように、対照レトリックは言語の rhetorical な機能を研究対象としているという点に見て取ることができる。Lakoff and Johnson (1980) 以来、レトリックは人間が経験的に読み取った意味を「言語の創造性」や「意味の拡張」として表面化 (即ち、言語化) させる機能を持っているということが言われてきた。人間には、新たな概念を記号化した段階においては特殊なもの (即ち、有契的なもの) として見なすが、それを繰り返し使用してゆく過程で運用上の妥当性が高まると、それを当たり前のもの (即ち、無契的なもの) として見なす傾向がある。概念化された意味が慣習化され、脳内の語彙項目に登録されてしまうと、母語話者であるからこそ見出せない問題が発生する。それを解明する方法は、異なる文化圏の言語のレトリックと比較することによって慣習化された意味を顕在化させるよりほかはない。ここに、外国語学習の意義がもたらされるのである。(cf. Lakoff and Turner (1989)、池上 (1991, 1992)、高野 (2000))

本稿はこの先、三つの章 (Ⅱ章～Ⅳ章) で構成されている。Ⅱ章は対照レトリック研究がどのような点において英語教育 (広くは外国語教育) に貢献しうるのかという問題と、現在の英語教育が抱える問題とを検証する。Ⅲ章では日英語の対照レトリック研究成果を概観する。そこでは、英語の母語話者から見た日本語という視点と、日本人が外国語 (ほとんどの場合、英語) と日本語を比較文化論的に捉えた研究とを見比べることになる。Ⅳ章は、日英語の対照レトリック研究の成果がどのように英語教育の現場で役立つのか、自戒を込めて検討する。

Ⅱ. 言語学と語学教育

これまで言語学は、(心理学や教育学とともに) 語学教育に多大な貢献をしてきた。この点において、語学教育とは言語学の研究成果を教室の中で実践・応用しているもの²⁾ として捉えることができる。従って、言語学がどのように言語を捉えるかという問題は、語学教師にとっては重要な問題となる。語学教師は常に最新の言語研究の動向に敏感であり、それがどのように学習者に貢献し得るかという可能性を追求する姿勢を持ち続けなければならない。ここでは、言語学が研究対象としての言語をどのように見定めてきたのという歴史的な背景と、語学教師がどのように言語学の研究成果を実践するべきかという主張、そして、語

学教育の中で見落とされがちな基本姿勢について検証する。

1. 言語学の研究対象

言語学の歴史は、研究対象となる言語をどのように捉えるかということ定義する歴史であった。構造主義的に言語を捉えていた時代において、言語学は、ソシュールの *langue* やチョムスキーの *competence* のように、同一の共同体に属している構成員であれば誰もが生得的に備えている（と思われていた）能力によって規定できる部分だけを扱っていただければよかった。当時の言語学には、抽象的な概念体系としての記号の内なる構造を記述することだけが求められていたからである。

言語は抽象的な構造物として見なされ、そこには一定の階層関係（音→語→文→テキスト）が成立すると考えられた。これを合理的に解釈すると、最下位にある音から順に正しく組み合わせられれば、最上位のテキストを構成することが可能であると仮定される。しかし、発音可能なすべての音の配列が語を形成しているわけではないように、複数の語が集まれば文を構成するというわけでもない。なぜなら、そこにはそれぞれの言語に固有の言語コード（ある言葉話す人々の間で共有される言語構造の規範、狭義の文法）というものが存在するからである。同様に、複数の文を集めればテキストが構成されるというわけではない。テキストを規定するためには、それを構成する文と文とを正しく結びつけ、それが特定の文脈において機能するための *textuality*（テキスト性）が要求されるからである。

言語学が文のレベルまでを扱うだけの学問であれば、その文が文法的に正しいかどうかを大きな枠組みとして捉え、次いで語法上の制約に従って語の配列が正しく行われているかどうかを母語話者の直感で判断するだけでよかった。しかし、複数の文から成るテキストを扱うためには、その背後にある構成上の原理（即ち、テキスト性）を正しく理解し、それを判断する必要がある。とりわけ、テキストの構成要素に多義や曖昧さが発生した場合、意味の決定には *context*（文脈）が重要な役割を担うことになる。文脈は、テキストの意味を解釈する過程において、その言語の使用者の経験的な知識（スキーマ）を想起するものであり、その表層レベルの結束構造（*cohesion*）と、深層レベルの結束性（*coherence*）とに深く関わるものである。テキストの解釈にテキスト性に関わることになれば、ソシュールが言語研究の対象から除外した *parole* や、チョムスキーが除外した *performance* の問題が介入してくるというのは、当然の帰結となるであろう。

言語が使用されるというのは、話し手がある文脈における特定の目的を持って発話し、それが聞き手との会話³⁾ という行為を通じて達成されるまでを意味する。会話を成立させるためには、話し手と聞き手とが互いの役割を果たすことが期待される。社会という文脈で言語使用を捉えると、会話の関与者には相手の面子を保つこと（*politeness*）、相互に順序良く発話し合うこと（*turn taking*）、そして、必要な情報を必要なだけ提供し合うこと（*conversation principles*）などが期待されているということがわかる。

言語使用における意味伝達のしくみを理解するため、言語学は社会学の用語である談話 (discourse) を採用した。ディスコースという概念を導入することによって、談話の関与者間の関係性やテキストの論理構造が解明され、特定の文脈における情報伝達の仕組みが説明できるようになった。言語学が研究対象としての言語を理解する上で人間を正しく位置づける必要を認識するようになると、人間の身体性や心理的側面 (例えば、「意識」、「思考」、「認知」という問題) にまで関心を広げるようになった。言語学は、もはや言語現象を閉じたものとして記述するためだけに用いられる無味乾燥な道具ではなく、人間に固有の不確定要素 (例えば、曖昧さやゆらぎ) までも研究対象とする学問へと変貌したのである。

2. 言語研究成果と語学教育の実践

テキストを理解する過程で文脈が重要な役割を果たすということが言語学によって明らかになると、語学教育の世界でも特定の文脈における言語使用と情報伝達の仕組みというものが注目されるようになった。日本の語学教育の世界でも、文脈と会話の関与者を正しく位置づけるディスコースという概念が導入されることは、多くの語学教師に歓迎された。

教師がディスコースという概念を教室に持ち込むには、少なくとも二通りの方法が考えられる。そのうちの一つの方法は、学習者にディスコースというものについて事前に説明し、談話の分析方法を与えてからテキストを理解させるやり方である。これは、言語に関する知識をいくつものテキストに応用することによって、言語運用能力を向上させようとするものである。もうひとつの方法は、テキストの理解をさせる過程で談話分析の手がかりを質問形式で発し、学習者に答えさせるやり方である。これは、言語のあらゆる部門に関わる情報が有機的に関連しあっているということを学習者自身に発見させることを通じて、言語運用能力を向上させようとするものである。

二つの授業形態は、使用されるテキストの妥当性 (例えば、その長さや難易度)、学習者の既習得内容の定着度、動機づけという語学教育の関連要素によっても変動する。このほか、関連すると思われる要素 (項目) によって二つの授業形態を比較したものが、下の表である。

Table 1. 授業形態と関連項目

関連項目 \ 授業形態	講義形式	対話形式
授業の方法	分析方法を提供し、それを応用	Q & A 方式
期待されるクラスサイズ	大	小
教師が説明に使用する言語	学習者の母国語	母国語 / 学習中の言語
学習者の記憶	長期	短期
授業の準備	必要	かなり必要

講義形式の授業では、学習者に分析方法を定着させるまで、説明に多くの時間を必要とする。こうした授業では、語学教師が一方向的に説明するのを学習者は聞かされることになる。

それに対し、対話形式の授業では、学習者が発話する機会を多く確保することができる。伝統的な講義形式は多くの学習者を一斉に指導することが可能だが、学習者との対話を通じて授業内容を伝えるには少人数のクラス編成が望ましい。説明を重視する授業には学習者の母国語による指導が効果的なものに対し、対話形式の授業では母国語と学習中の言語が必要に応じて使い分けられるという利点がある。分析の枠組みをどの程度まで理解するかにもよるが、どのようなテキストにも応用可能な分析方法が学習者に習得されれば、授業効果は持続される（即ち、長期記憶に残る）。それに対し、学習者自身が質問に一定の関連性を見出せなかった場合、対話形式の授業の中で受ける刺激から得た情報を長期記憶として残すことは困難なものとなる。

どちらの教授法も一長一短ではあるが、語学教師はどちらの方法でも授業が行えなければならぬ。なぜなら、教授法というものは学習者の実情に合わせて選択されるからこそ、その効果を発揮するからである。理想的な授業とは、落ちついて説明を聞く時間とバラエティーに富んだ作業の時間とがバランスよく組み合わせられ、学習した内容がその後の学習に生かされるものである。めまぐるしく移り変わるばかりでは表面的な理解しかされず、一本調子の授業は学習者にとって退屈なものとなる。講義形式の授業にも対話が必要であるように、対話形式の授業においても説明の時間は必要である。両者を必要に応じて使い分け、学習者が「わかった」、「そうだったのか」と思い、感じる瞬間を毎回体験できるのが理想の授業だと考えられる。

3. 求められている言語教育

日本の英語教育の現場では、ディスコース研究から派生した‘communication’という用語が人気を博し、コミュニケーション重視の英語教育というものが注目されるようになった。受信型教育から発信型教育へ向かうために英語を自然な速さで聞かせ、その音に近づくように練習させるという教授法が、読み書きと文法偏重の授業に新風をもたらすと期待されたのである。そこでは、細かな文法の規則や少しくらいの誤りは問題にされず、教師が作り出す特定の場面においてより多くの英語を発信することが重視された。極端なものになると、文法の知識そのものが不必要だと主張することもあった。

しかし、ディスコースが「文脈における言語使用」という意味で用いた communication という用語は、本来、その会話を成立させているものは何かを考えるためのキーワードである。どのような音がどのように発せられ、どのような語が選択され、その結果として産出（発話）された文は、話し手のどのような意図を伝えているのか。また、聞き手はその発話に対し、何を根拠にどのように理解するのか。その会話の結果、聞き手と話し手の間で行われた社会的な役割は何か。こうしたことを考えるために用いられるべき communication という用語が active（もしくは、activate）という意味で解釈され、伝統的な教授法の利点まで否定されるのを目の当たりにするのは耐え難いことであった。

古い英語教授法という批判にさらされながらも、教師は教材の周辺にある文化的背景や関連情報を事前に入手し、学習者が授業内容に対する興味を失わないように工夫し、段階的に英語を理解できるように細かな説明を行ってきた。既に学習者が知っている語彙によって新出単語の意味を気づかせ、群動詞や熟語の意味を例文によって説明し、英文をできるだけ日本語で解釈できるように指導してきたのである。こうした手順は、言語のどの部分を観察しても、それぞれが有機的に関連しあって機能しているということを学習者に伝える上で、正しいものである。

コミュニケーション重視の英語教育は、また、教室で英語を多用することを推奨した。心理学者の提唱する *thinking in English* を *thinking through conversation in English* と誤解したためであると推測されるが、これは重大なミスである。冷静になって考えればわかることであるが、言語による概念化が行われていない語彙や語法まで英語で理解させようとするのは、あまりにも無謀な教授法であると言わざるを得ない。

言語教育の考え方は、外国語学習（と）は…意識的学習を基盤とするものである。…学習や運用の基盤にあるものは意識化された知識である。これまでも、外国語学習や運用にはある種のセンスが重要であるということが言われることがあったが、これはまさに本論で言う言語意識そのものなのである。まず、学習者の母語を使ってその育成が図られるのがよい。なんと言っても、母語に対しては直感が働く。言語教育では、その直感…を意識化させることがその第一歩となる。 (大津 2006)

カッコ付き文字と下線は筆者によるもの

言語教育が母語の直感を用いて意識化される基盤に依存しているのなら、英語教育がその基盤に依存していない理由は見当たらない。教育効果や学習者の満足度を無視してまで授業を英語で行うことを教師に強く期待する教育機関が増えているが、それこそが大津の言う「原理なき英語教育」の典型的な例であろう。学習者を教育の中心に置かないものは、教育活動とは言えない。

Ⅲ. 対照レトリック研究

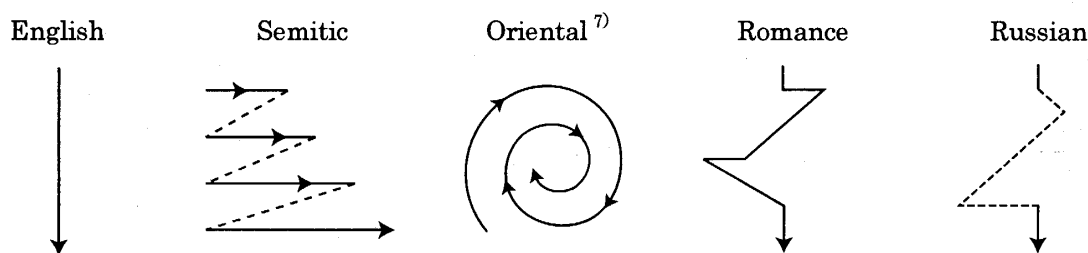
20世紀前半、ヨーロッパ諸言語の絶対的な優位性に疑問を抱いた文化人類学者たち⁴⁾により、未開の地（即ち、文化的に発展途上と見なされた国々）の言語を対象とした研究が進められた。各地で行われた調査から、言語と文化と思考の間には経験に基づいた相互関係があるということが明らかにされた⁵⁾。その結果、人間の思考様式と言語活動（言語使用によって、ある特定の目的を達成しようとする行為）が密接に関わり合うように、文化と言語⁶⁾、文化と思考とが連動していると考えられ、その視点が対照レトリックを成立させる土壌となったのである。

文化人類学的な言語研究の成果は、特定の言語を使用する民族の文化を絶対視することを否定しただけではなく、ある文化圏で好ましいとされる言語活動が、そのまま他の文化圏でも同じように評価されるわけではないということを明らかにした。換言すると、達成されるべき目的が同じであったとしても、文化が違えばその表現の仕方（傾向、嗜好）に何らかの違いが現れるということがわかったのである。

1. 文化と思考のパターン

異文化間における言語使用の傾向性の問題は、20世紀の半ば、外国語教育との関連で話題になった。‘Cultural Thought Patterns in Intercultural Education’ と題された論考の中で、Kaplan (1966) はさまざまな文化圏から集まってきた留学生の作文指導を通じ、パラグラフ構成の仕方に一定の傾向があるということに気づいた。その違いは、次のように図式化されている。

Figure 1. 文化に観られる作文構成の傾向



(Kaplan 1966, p.15)

上の図で Kaplan は、文化に観られる文章構成の傾向を英語教育の視点で類型化したのだが、個々の学生の作文能力が疑わしい点が指摘され、また、英語以外の言語には論理性が欠如していると言っているかのように解釈され、批判にさらされたこともある。しかし、Kaplan が論考の中で言わんとしたのは、英語以外の言語にもその言語独自のパラグラフの展開方法があるということであった。

This discussion is not intended to offer any criticism of other existing paragraph developments; rather it is intended only to demonstrate that paragraph developments other than those normally regarded as desirable in English do exist. (Kaplan 1966, p.14)

残念なことに上図のような言語現象が現れる理由は何も説明されていないのだが⁸⁾、この論考の特筆すべき点は、Kaplan の提言する ‘contrastive rhetoric’ という概念が、当時の外国語教育研究には珍しく、文のレベルを超えたテキストの談話構造の類型に着目していた⁹⁾ということにある。また、一定レベルに達した学習者に限ると断りつつも、母語と英語の

文法を比較するように、それぞれの文化圏で好ましいとされる表現の手段（Kaplan の言う rhetoric）の違いを比較させるべきであると考えていることにある。

Such an approach has the advantage that it may help the foreign students to form standards of judgment consistent with the demands made upon him by the educational system of which he has become a part. At the same time, by accounting for the cultural aspects of logic which underlie the rhetorical structure, this approach may bring the student not only to an understanding of contrastive grammar and a new vocabulary, which are parts of any reading task, but also to a grasp of idea and structure in units larger than the sentence. (ibid, p.15)

2. 英語母語話者から見た日本語の論理構成

- ① 大阪本町絲屋の娘、
- ② 姉は十六、妹は十五。
- ③ 諸国諸大名は刀で斬るが、
- ④ 絲屋の娘は目で殺す¹⁰⁾。

この四行詩は日本語の論理構成を最も端的に表すもので、我々の言語経験の中で頻繁に選択される思考様式を反映していると考えられるものである。①で提起された話題を②で受けた後、これまでとは異なる視点を③として導入して④で完結する。一般的に「起承転結」と呼ばれるこの表現形式は、日本人の言語使用に深く浸透している。Hinds (1983, 1990) は、英語母語話者がこの日本的な論理構造を現すレトリックをどのように評価するかという実験を行っている。

(1) 「起承転結」に対する評価

Hinds (1983) は、可能な限り日本語のパラグラフ構成に沿って英訳した朝日新聞の「天声人語」をテキストとして、Unity（論旨が論理的に展開されているか）、Focus（話題に的確な焦点が当てられているか）、Coherence（全体としてまとまっているか）の三点について、アメリカ英語の母語話者と日本人に5段階で評価をさせた。

日本人にとって「起承転結」はごく当たり前のように身につけている談話構成上のレトリックなので、英語訳がテキストであるとは言え、日本人による評価の平均値が高かったということは予測が可能であろう。それに対してアメリカ英語の母語話者による評価は総じて低く、平均値にして約2ポイントの差がついた。以上の結果から、次の仮説を立てることができる。

<仮説1>

ある言語の母語話者にとって自然（即ち、普通、当然、心地よい）と感じられる談話構成は、別の言語の母語話者にとっても同じ程度に自然なものであるとは限らない

この実験によって Hinds は、英語に翻訳されたテキストが「起承転結」をかなりの程度に維持していたから日本人の評価が高く、日本的な言語使用の嗜好（傾向）がアメリカ英語の母語話者には理解できなかったとは結論づけてはいない。むしろ、地域によって（広くは文化によって）慣習化された論理展開の方向性¹¹⁾ というものがあるということに関心を寄せてゆく。

(2)「演繹的」対「帰納的」議論形態

Hinds (1990) は、論説文の議論構成として、その陳述（主題、トピック）を前半に置く deductive（演繹的）な構成法と、陳述を後半に置く inductive（帰納的）な構成法という二項を対立させることに異議を唱えた。

陳述を読者にわかり易く、かつ、論理的に説明してゆくため、英語の母語話者は論説文に演繹的な表現を用いるように訓練されている。読者としての英語母語話者が論説文に演繹的な構成が見出せなかったとき、彼らはそこに帰納的な構成を期待し、筆者が残す説得的な理由をたどりながら、最終パラグラフに結論を期待するのである。サンプルとして選ばれたアジアの言語のテキスト（日本語、韓国語、中国語、タイ語の英語訳）の表層部分には帰納的なレトリック構造が観察された¹²⁾。しかし、日本語に関して言うと、英語の母語話者の感覚で言うところの「結論」が最後まで見出せない。

英語の母語話者がアジアの言語のテキストを理解できない理由を、Hinds は 'expectation'（期待）という言葉で説明している。

If English-speaking readers expect that an article is meant to convince or persuade, they expect that all arguments will contribute directly to that cause. If, on the other hand, they expect that the purpose of an article is to introduce a set of observations related loosely to a general topic, and that the task of the readers is to sort and evaluate these observations, they have a clear idea of the purpose of writing in some other cultures. (Hinds 1990, p.99)

一見、帰納的な構成をしているが、英語の母語話者が期待するものとは似て非なるテキストが存在することを明らかにし、Hinds は準帰納的 (quasi-inductive) という論理構成の可能性を示唆した。そこには、読者自身にその陳述について考えさせ、独自の結論を導き出させようとする目的がある。他方、書き手には自身の考え（主張）があったとしても、読者を説得する必要がない。なぜなら、読者に問題の所在を見つけさせ、それを考えさせれば良い

のだから¹³⁾。以上より、二つ目の仮説を立てる。

<仮説2>

「情報の発信者に責任が課せられる型の言語」と「情報の受信者に責任が課せられる型の言語」という対立関係が言語の類型として成立する

Hindsの対照レトリック研究は、隣接する研究領域に大きく貢献することになる。言語研究の世界では、英語の絶対的な優位性が守られていた時代には評価されることのなかった「言語相対説」が再認識されるようになる。また、言語研究に言語の使用者である人間の物理的(身体的)・内面的(精神的)な側面や、その人間が言語を用いる文脈としての社会や文化を取り込むことの必要性を認識させたのである。英語教育の現場では、英語母語話者が期待する英語の論理構成を日本人学習者が発信できるように訓練するため、言語のさまざまなレベル(部門)に渡る有機的なカリキュラムが整備されるようになった。

文化人類学の研究以来、言語を正しく捉えるということの意義、その方法、そして、その研究の範囲設定についての議論が続けられてきた。対照レトリックは、こうした問題に答えを導き出す方向性を示し、英語以外の言語を相対的に研究する方法と、その意義を提供している。今後、言語に関わる者は、対象となる言語と母国語との比較・対照の中で、言語研究の領域を拡張してゆくべきだと考える。

3. 日英語の比較：比較文化論の視点から

前節までに、日本語に対する英語母語話者の視点について検証してきたが、本節では日本人が日本という国の内側から見た日本語を、民族学的、文化論的視点で研究した成果を概観する。Hinds(1983,1990)が取り上げたデータサンプル(日本人が書いた英語)の談話構成には、どのような文化的背景が影響していたのだろうか。

(1) 日本人から観た日本語の論理

戸山(1973)は、西洋文化が流入してきた時から要請されている「日本語の論理構成の原形」を確立してこなかったことへの怠慢を指摘してはいるが、日本語に観られるいくつかの特徴的な文章構成の傾向を分類する中で、日本語に固有の論理の存在を認め、それを擁護している。日本語の論理とは、日本の風土(地理的・文化的要因)によって形作られた日本人の思考法を表出させることには適しており、日本人が生活の中で必要としてきた伝達方法(即ち、論理構成の傾向)は西洋の言語の方法と異なるのは当然であると主張している。

歴史的に隣国との接触を持たない島国の中で、日本人は農耕民族として同じ土地に永く居住していた。そのため、談話の関与者(即ち、話し手と聞き手)の間に心理的に親密な関係が成立し、「主体と客体との関係を明確に規定する必要」を風化させたと戸山は分析してい

る。こうした背景のもとで成立してきた日本語の思考法は、言語活動における「主-客」対立から自己を認識する英語の思考法¹⁴⁾とは明らかに異なる。この違いが談話の関与者間の関係の明示を避ける言語と、無生物でさえ主語としての地位を与えられる言語との対立となって現れているのだと考えることができる。

また、談話の関与者間の親密関係は「線状の論理構成」によってゆらぎない表現形式を好まない傾向を生み出し、論理を構成する要素の間に隙間を創る原因になっている。戸山の言う「点の論理」は相互に「根と根で」関連しあっており、それは「連想の論理」を生み出すと考えられている。そこから発生したと考えられる「間接的」で「象徴的」な表現形式は、日本語という言語の「曖昧さ」として解釈されることがあるが、連句を例に引き合いに、それを否定している。言語に内在する暗示的な傾向が、その言語を用いる国の文学形態に影響を及ぼしていることを指摘している点は、対象レトリックの研究対象を拡張する上で、貴重な議論である。

連句における、前句と次の句とのつながり方もまた、日本語の論理の一面を良く表しているように思われる。連句の各句の連結は決して、 $A - A_1 - A_2 - A_3$ というように直線的論理に従って展開するのではない。Aのあとはその延長上の A_1 を下敷きにしながら、あえてそれを外したBをつづける。Bのあとは B_1 をふまえながらそれから飛躍したCをつづけるというように不連続の連続 $A - B (A_1) - C (B_1) - D (C_1)$ になっている。これを連句では「いつり」とか「匂い」とか「ひびき」とかいう言葉で呼んでいる。

(戸山 1983, p.19)

戸山はこの他に、日本語が視覚言語としての漢字と聴覚言語としてのひらがなを併用している点に注目し、二項対立の文化と比較している。二項の対立とは、どちらか一方の却下か、両者とは異なる第三の選択肢¹⁵⁾を発生させる論理思考形態である。それに対し、日本型の文化は両立の文化であると考えられる。この多元的な重層構造を持つ日本語に特徴的な論理思考形態が主題提示を遅らせ、テキストの聞き手（或いは、読み手）に解釈の責任を負わせるという文章構成を確立していったと考えられる。

戸山の指摘が全体的に印象論的な印象を与えているのは、日本語に特徴的な論理形態に対する分析的な議論というよりは、文章構成の基本として西洋型の論理形態を提示するにとどまっているからかもしれない。

文章構成の基本はまず、思考、思想の展開ということで、そのためには、重要な点をはっきりとさせて、それを論理的にたどって行って、点を線にすることを心がけなくてはならない。同じところをぐるぐる巡るような構造の文章は情緒的な効果はともかく、思想、思考の伝達方法としては効率が低い。

(戸山 1983, p.43)

(2) 言語と行動様式

中村(1983)は日本人の思考様式が「集団の論理を優先し、その成員の個としての独立を抑えてきた民族の歴史に依拠する」と考え、戸山(前出)が指摘した日本的論理構成を別の観点から眺めている。

第一は“非限定性”である。聞き手との関係を大切にする日本人の言語行動では、ものをはっきりと言いすぎることを警戒する。あまりに明確な表現は、解釈の幅がないため、相手の判断をおおぐという姿勢に欠ける。つまり、送り手の考えるただ一つの意味を受け手が否応なく認めねばならないような的確な表現は、受け手の自主的な判断の余地を残さないで、相手に強く響くわけだ。

(中村 1983, p.302)

中村が「農耕民族の定住生活から自然に起こった」談話の関与者の間にある緊密な関係を前提としていることと、戸山の言う「点の論理」を「自主的な判断の余地」を残すことを美德としていると見て取るのは、同質の着眼点からであると考えられる。

第二の点として中村が挙げた“間接性”も、戸山の「連想の論理」から生じた表現形式と多くの部分で共通する。しかし、中村が日本人の行動様式にそれを見出している点は興味深い。親しい友人に貸した本を返して欲しいという内容の手紙をアメリカ人と日本人各20名に書かせた実験で、日本人の手紙には長いプロローグとエピローグが見られたという結果を引用している。これを中村は、客が訪問先を辞する際の行動に見て取った。

アメリカの場合は入り口のドアの開閉ひとつで別れは一瞬のうちに成立する。ところが、日本の場合は、座敷でお辞儀を交わし、玄関で再びお辞儀を交わし、門で三たびお辞儀を交わす。さらには、バス停まで送るか、少なくとも門のところに立って、相手の姿が見えなくなるまで見送るのが礼儀とされる。つまり、別れは徐々に起こる。手紙でいきなり用件を切り出さないのも、できるだけ唐突さを避け、自然に運びたいのだ。プロローグやエピローグはその緩衝地帯なのである。(ibid, p.304)

このほかにも、中村は戸山の「点の論理」を表現の“省略性”として見て取り、何から何まで言語化してしまうことを日本人が好まないことを指摘し、これらの日本語の論理構成法は文法(語順)とも並列関係にあると考えている。その一つの表れとして指摘されるのは、英語がSVO型の言語であるために語順の転倒が意味の変化を起こすのに対し、日本語は格助詞の働きが文の意味に関わるSOV型の言語なので、語順の転倒は必ずしも意味の変化を引き起こさないという点である。また、述語動詞を文末に置く日本語は、「その文が肯定なのか否定なのか、断定なのか推量なのか、平叙なのか疑問なのか、あるいは、能動なのか受動なのかといった点が、一文の終わるときになって示されることが多い。そのような文構造に慣れている日本人の文章構成には、結論めいたことはもちろん、自分の意見や判断を文章の終わり近くまで保留にする、という傾向があらわれてもふしぎではない。(p.309)」と結

んでいる。

(3) 日本における対照レトリックの結実

安藤(1986)による「対照言語学研究」は、語彙、文法、テキストという言語の領域を超えて、思考様式、論理、価値観にまで及ぶ比較文化論への試みである。日英語の表現構造の比較を通じ、英語を「スル的な言語」、日本語を「ナル的な言語」として対立させ、その対比関係を言語流類型学の視点から例証している。その一例として「春になる。(Spring has come.)」という表現を対立させ、次のように考察している。

＜スル的＞な言語は、＜固体がある行為をする＞というふうに、行為者を際立たせて一つまり、文のテーマにして一表現しようとする言語であるのに対して、＜ナル的＞な言語は、行為者を表面に出さずに、あたかも＜自然の成り行きでそうなった＞というふうに表現する言語であるということになる。(1)のような文(上の例文)は、言語類型学的には、＜スル的＞な言語である英語では1項動詞によるSV型であるのに対し、＜ナル的＞な言語である日本語ではゼロ項動詞によるV型であると言えるであろう。

(安藤 1986, p.257)

カッコ内の下線つき文字は、筆者によるもの

この対立関係から安藤が類推しているのは、「自我の確立と軌を一にする近代の発想」と「事象が次第にある状態になるというふうな捉え方」という対立関係である。これは、西洋の集団的社会構造における個人と個人とが互いに契約関係にあり、常に分かり合えるわけではない者同士が言語使用によって理解しあおうとするのに対し、日本の社会構造においては、集団の利益のために個人が犠牲になることが通例になっていることと対照的な関係にある。これこそが、安藤の考える日英の文化比較の基盤なのである。この基盤を元に安藤が対比させたものをまとめたのが、下の表である。

Table 2. 安藤による日英の文化比較の基盤

	対比される項目
1	個の論理 vs. 集団の論理
2	2元論 vs. 全体観的思考様式
3	積極的 vs. 消極的な行動様式
4	自己主張の文化 vs. 自己滅却の文化
5	人間関係の非連続性 vs. 連続
6	人間と動物の非連続性 vs. 連続
7	征服すべき自然 vs. 服従すべき自然
8	etc.

ここでは、先行研究（戸山 1973、中村 1983）との重複を避けるために、関連するものを事前にいくつかの項目に分類し、これまで検証してこなかったものだけを扱うことにする。

社会構造の違いが形成した「個の論理 vs. 集団の論理」は、当然の帰結として「自己主張の文化 vs. 自己滅却の文化」を発生させ、それが「積極的 vs. 消極的な行動様式」と関連している。また、「自己主張の文化 vs. 自己滅却の文化」は、人間の年齢、性別、社会的な役割を超えて「人間関係の非連続性 vs. 連続性」を形成していると考えられる。

残された四つの項目（2、6、7、8）のうち、「2元論 vs. 全体観的思考様式」は、戸山の研究を紹介した際、日本的な思考様式には「多元的な発想」というものがあり、複数の異質のものが共存することを受け入れる文化的な背景があることをすでに述べた。これに近いものとして、安藤が「人間と動物の非連続性 vs. 連続性」を説明している部分を見てみたい。

旧約聖書の時代より、人間の生活とどれだけ近い関係にあったとしても、西洋における動物は人間と同列に扱われる対象にはなり得なかった。これは、西洋的は発想の中にある二項対立の一方を人間が、もう一方に動物が位置づけられていると考えれば理解しやすい。それに対し、日本的な発想において、動物は人間とともに畏怖の念を持って接する自然から生活の糧を授かるもの同士であった。労働をともにし、ともに苦勞するパートナーとして位置づけられているからこそ、神として祭ることさえある。大陸文化からの借用とは言え、日本における動物は干支を一年ごとに変えて祭られ、神を守るものとして珍重される対象なのである。

最後の項目（etc.）は大脳生理学の研究成果を引用しており、人間の脳は左右で処理するものが決められているのだが、その振り分けが文化によって異なるという安藤の仮説に基づいている。西洋では知的な計算は左脳（言語脳）で行われるため、言語現象に対して論理的で理性的な処理が可能になる。一方の日本人は、言語脳によって言語以外のもの（例えば、音）まで処理しようとする傾向にある。それが西洋的な論理性と、日本的な情緒性として対立するものであると考えられている。

これまで、対照レトリック研究の成果を概観してきた。これまでに明かされた事実や研究の方法、そして、日本語と英語の文化的な違いによる論理構造の傾向の違いを観察してきた。次なる問題は、これらの知識をどのように教室に持ち込むかを検討することにある。

IV. 対照レトリックと英語教育

これまで概観してきた対照レトリック研究は、どのように英語教育の実践に役立つのであろうか。結論を先に言ってしまうと、先行研究から得た知識は、そのままの形で教室に持ち込まれたとしても、何ら役には立たない。その理由はいくつもあるが、第一に考えられるのは、日本の教育制度（特に、中等教育の現場）における英語教育というものが他の科目と分断されていて、独立した科目として扱われているという点にある。科目相互の関連を分断し

たものとした教育環境では、同じ名称のものであっても教材、教室、担当者が異なれば、まったく違ったものとして扱われてしまう。何も英語で他の科目を教えるべきだなどと言っているのではない。同時進行で行われている科目の内容が英語の授業内容に反映していることによって、相補的な関連性を築き上げることができると提言しているのである。

次に、高等教育機関における問題として、それぞれの事情に則した教育目標が設定されていないという点が挙げられる。一般的なレベルを維持するためのものなのか、専門教育科目に関する情報を英語で入手できるまでのレベルなのか、その先で専門的な論文を書くことを目標としているのか、ほとんど何も決められていない場合が多い。「社会で通用する英語」、「仕事に役立つ英語」というものを示されれば客観的な根拠としての試験制度へ傾倒してしまうだけで、何ら改善は見られない。結局、何もできない状況は、いつものように高校や中学の教育環境に責任を摩り替えられるだけになってしまうのが現状である。

対照レトリックに話を戻すと、こうした言語研究の成果を語学教師が活用する方法があるとしたら、それは教壇に立つことに対して恐れを感じ続けることにある。自分がどれだけ未熟であろうとも、教材の内容や進捗の設定に不満があろうとも、授業の時間は必ずやってくる。その中で、語学教師は学習者を成長させる義務がある。自分との限られた接点の中で学んだことを、学習者がそれ以降の生活の中で活用する方法を示し、それが学習者に幸福をもたらすまでの責任がある。自分が英語を通じて学んだことのすべてを、自分が味わった苦勞を半減させて体感させなければならない。

言語研究は日進月歩であり、現在のパラダイムがいつ転換するかも知れない。その時になって、自分が教室の中で混乱している暇は無い。何も無かったかのような顔をして、これまでの言語観から最新の視点への軌道修正をしなければならない。だからこそ、最新の言語理論、教授法、情報技術に対して貪欲であり、好奇心を持ち続けなければならないのである。

対照レトリック研究は、語学教師が英語と日本語との間にある潜在的な違いを、比較文化と言う切り口で説明可能にしている。授業の内容を精査し、環境を整備することも重要であるように、授業で学習者に伝えていることには必ず根拠があるということを説明できるように、常に準備しておくべきである。

終わりに

今回の研究は、平成17年4月から12月までに行われた経営経済学英語担当者の定例会議の資料をまとめ、教員チームの理論的・技術的向上を目指した研修の結果を整理したものである。その性質上、教室で実践される英語教育への直接的な貢献より、理論に裏付けられた教育を実践するためのFDの様相が色濃く反映していることを断っておかなければならない。英語教育の目的を明らかにするため、今後も言語研究の成果を正しく理解するとともに、最新の研究の動向にも敏感でいる必要を強く感じている。

対照レトリックの理論研究を通じ、日英語の表層構造には現れない原理的な法則の存在と、その理由が母語話者であるからこそわかりづらい文化のコードを形成しているということを読者に理解していただければ幸いである。また、今年度の研修を受けた若い教師たちが、別の教育機関においても言語研究と語学教育の橋渡しとなるための研鑽を続け、次世代の教員育成の中心的な役割を果たしてくれることを願っている。

Notes

- 1) 本稿はこの抽象レベルにおける会話研究 (text linguistics と discourse analysis) をほぼ同義として扱うが、この先の議論では、構造上の単位をテキスト (text)、機能的な単位を談話 (discourse) という用語で表す。
- 2) 従って、すべての語学教師は応用言語学者であると見なすことができる。言語学者である以上、明確な言語観を持ち、言語理論に基づいた教育法の洗練を要求されることになる。
- 3) ディスコースのレベルにおける「会話」という用語は、その関与者による情報交換 (communication) を意味する。書き言葉によるディスコースは文字情報の交換となり、その関与者は書き手と読み手である。
- 4) 例えばウォーフは「進化論的な概念が現代の人間の肩に重く投げかけられて、偏狭な言語的偏見を刺激し、自らの思考様式とそのままとなっているごく少数の印欧語こそが言語の進化の頂点であり、開花したものであるというおおげさなばか話を生み出した」と述べている。(池上 (訳) 1993, p.60-61)
- 5) The Sapir-Whorf Hypothesis として知られている言語相対説の視点で、文化人類学のみならず、現代の言語学や社会学における議論の前提としても受け入れられている。人間は自然との関わり合いの中で文化を形成し、そこに属する集団の行動様式にある種のパターンを築き上げてきた。言語活動を行動様式の一形態と見なせば、人間の言語習慣にもかなりの程度まで一定のやり方 ('fashion of speech') が浸透していると考えられる。外界を概念化する段階で人間はすでに言語を用いているので、自らが属する文化の行動様式として無意識のうちに「好ましい言いまわし」が形成されていたとしても不思議ではない。
- 6) In some cases, there are 'fashions of speech', that are closely integrated configuration in each culture as a whole. In this integration, what is analyzed has something to do with varieties of action as their reaction, and of cultural development. (池上 1993, p.139)
- 7) Kaplan の論考には日本人学生が被験者として現れないのだが、このイメージスキーマが示すように、日本人の物言いや思考様式にも「なかなか本題に入らない」、「できることなら、周辺的话题を展開しているうちに相手に理解して欲しい」という傾向があるということは否定しがたい。
- 8) Kaplan の論考が再評価されるのは、なぜ留学生の出身文化圏によってこうした言語現象が観察されるのか、言語コードの背後で思考パターンに影響を及ぼしているのはどのような文化的コードなのか、という研究が進んでからとなる。(cf. 文化の記号論)
- 9) イギリスでは 1960 年代に 'text linguistics' という言語研究のフレームが完成していたが、機能主義的視点から言語哲学や心理学、社会学の研究成果が談話分析 (discourse analysis) として開花するのは 1970 年代のことである。談話分析が語学教育に効果的であるという議論は、更に、1980 年代まで待たなければならない。
- 10) これは筆者が小学生の時、最も短い典型的な日本語の作文構成例として習ったもので、江戸時代後期の漢学者、頼山陽 (1780 - 1832) が弟子に七言絶句の作り方を示すときに用いたものだとされている。各行頭の丸付き数字はこの後の説明のため、便宜上施されたものである。驚くべきこと

に、わずか四行の定型詩的なテキストが、登場する娘達の家の職業や年齢、大名なのか諸大名なのか、刀で斬るのか弓矢で殺すのかがさまざまな形で著されている。本稿では、池上(1991)で採用されたものを引用する。

- 11) 'a regional preference for the logical organization of information in expository writing'
(Hinds 1990, p.89)
- 12) TESOL Quarterly という英語教育関連の定期刊行物に、アメリカの大学生は一般論から具体的な内容へ進む傾向 (General-to-Specific) が強いのにに対し、日本人学生は具体的なことを一般化しようとする傾向 (Specific-to-General) があるという報告がされている。特に、一般論を述べる際に用いられる内容の分類に関しては、とても興味深い結果が見られる。(See Kobayashi 1984)
- 13) Rather, the task is to stimulate the reader into contemplating an issue or issues that might not have been previously considered. (ibid, p.100)
- 14) これはソシュールが記号の価値関係から意味を定義し、フロイトが無意識から意識の研究をしたことにも通じる発想法であると考えることができる。
- 15) テーゼ、アンチテーゼに対するジンテーゼ

参考文献

- 安藤貞夫 (1986) 『英語の論理・日本語の論理：対照言語学的研究』大修館
- 安藤貞夫訳 (1998) 『言語：ことばの研究序説』岩波文庫、Sapir (1921) Language : An Introduction to the Study of Speech (Harcourt, Brace and Company)
- Austin, J (1962) How To Do Things With Words (Oxford)
- Cook, G (1992) The Discourse of Advertising (Routledge)
- Coulthard, M (ed) (1992) Advances in Spoken Discourse Analysis (Routledge)
- Coulthard, M(ed) (1994) Advances in Written Text Analysis (Routledge)
- Coulthard et. al (ed) (1981) Studies in Discourse Analysis (Routledge)
- Grellet, F (1981) Developing Reading Skills: A practical guide to reading comprehension Exercises (CUP)
- Grice, P (1975) 'Logic and Conversation' in Cole and Morgan (ed) Syntax and Semantics III : Speech Acts (Academic Press)
- Hinds, J. (1983) 'Contrastive Rhetoric : Japanese and English' in Text III (p.183-195)
(1990) 'Inductive, Deductive, Quasi-inductive : Expository Writing in Japanese, Korean, Chinese, and Thai' in Connor et. al. (1990) Coherence in Writing : Research and Pedagogical Perspectives
- 本名信行 (1989) 講座 日本語と日本語教育『日本語の文体と英語の文体』明治書院
- Halliday and Hassan (1976) Cohesion in English (Longman)
(1985) Language, context, and text: aspects of language in a social-semiotic perspective (OUP)
- 池上嘉彦 (1991) 『英文法を考える：文法とコミュニケーションの間』ちくまライブラリー
(1992) 『詩学と文化記号論』講談社学術文庫
- 池上嘉彦訳 (1993) 『言語・思考・現実』講談社学術文庫、Whorf (1956) Language, Thought and Reality in Carroll, J. ed. (1956) Selected Writings of Benjamin Lee Whorf (MIT Press)
- 池上嘉彦ほか (1994) 『文化記号論：ことばのコードと文化のコード』講談社学術文庫
- 景山太郎 (2001) 『日英対照 動詞の意味と構文』大修館

- Kaplan, R (1966) 'Cultural Thought Patterns in Intercultural Education' in *Language Learning XVI* (p.1-20)
- Kobayashi, H (1984) 'Rhetorical Patterns in English and Japanese' *TESOL Quarterly*
- Lakoff and Johnson (1980) *Rhetoric We Live By* (The University of Chicago Press)
- Lakoff and Turner (1989) *More Than Cool Reason : A Field Guide to Poetic Metaphor* (The University of Chicago Press)
- Levin, B (1993) *English Verb Classes and Alternations : A Preliminary Investigation* (The University of Chicago Press)
- Levin and Hovav (1995) *Unaccusativity: At the Syntax-Lexical Semantics Interface* (MIT)
- McCarthy, M (1991) *Discourse Analysis for Language Teachers* (CUP)
- McWhorter, K (2005) *Essential Reading Skills, 2nd edition* (Longman)
- メイナード, K (1997) 『談話分析の可能性：理論・方法・日本語の表現性』くろしお出版
- 中村 明 (1983) 『日本語のレトリック』講座日本語の表現 5 筑摩書房
- 野崎京子 (1988) 'Stilted English : 日本人英語のスタイル' 『現代英語教育 8月号』
- 大津由紀雄 (2006) '原理なき英語教育からの脱却をめざして (大学編)' 英語・英文学・英語学教育を考える① 『英語青年 4月号』 (p.33-35)
- Renkema, J (2004) *Introduction to Discourse Analysis* (Amsterdam)
- 佐久間まゆみ (1998) 『文章表現の工夫』新「ことば」シリーズ7 文化庁
- Searle, J (1969) *Speech Act: An Essay in the Philosophy of Language* (CUP)
- Searle, J (ed) (1971) *The Philosophy of Language* (OUP)
- 瀬戸賢一 (2005) 『よくわかる比喩：ことばの根っこをもっとしろう』研究社
- Shiffrin, et al (2001) *The Handbook of Discourse Analysis* (Blackwell)
- 島田ほか (2005) 『パラグラフリーディングのストラテジー：読み方・解き方編』河合出版
- Sweetser, E (1990) *From etymology to pragmatics* (CUP)
- 高野秀之 (2000) 'プラクティカルスタイリスティックス (II) : 認知言語学的な英文学作品の解釈' 嘉悦女子短期大学研究論集 第43巻 (通巻79号)
- 外山滋比古 (1973) 『日本語の論理』中央公論社
- Ulla, C (1996) *Contrastive Rhetoric* (CUP)
- Yamada, H (1997) *Different Games, Different Rules* (Oxford)
- 柳父 章 (1998) 『翻訳語を読む：異文化コミュニケーションの明暗』丸山学芸図書